

はじめに——わが子の人間関係を応援するために、親ができること

小学校入学は、「人間関係づくり」デビュー

「一年生になったら、一年生になったら、友達100人 できるかな」

幼稚園・保育園から、いよいよ小学校入学！

子どもも親も、ドキドキ、ワクワクの瞬間でもあります。

親としてみれば、「あんな小さかった子が、いよいよ小学生か……」と感慨にふけ

るとともに、わが子の成長に対するうれしさと期待感でいっぱいになるものですよね。一方で、「どんな小学校生活を送るんだろう?」「授業にちゃんとついていけるかしら?」「担任の先生はどんな人?」といったものに加え、ある1つの大きな不安が生じるのではないのでしょうか?

それは、「わが子のお友達関係」です。

「仲のいいお友達ができるだろうか?」

「仲間外れにならないだろうか?」

「いじめに遭わないだろうか?」

「いじめの側にならないだろうか?」

小学校入学は、子どもたちにとって、幼稚園・保育園に比べて、人間関係の幅が広がることを意味します。それは、社会に出ていく第一歩でもあります。

だからこそ、お勉強の心配をする以上に、わが子の人間関係は、親であれば誰もが心配になるものです。

本書では、そんなお子さんたちの人間関係について、38年に及ぶ教師歴での教室の現場を通して見いだした「お友達に好かれる子ども」の特徴を基に、親としてわが子の人間関係を応援する方法をお伝えします。

学校でできること、家庭でできること

私は38年にわたり、教員として多くの子どもたちと接してきました。直接担任した子どもたちのみならず、生徒指導面でかかわったり、いろいろな特別活動でかかわった子どもたちも合わせれば、1500人以上になります。

2015年3月に教員を退職しましたが、その後も、「風路教育研究所」として、小学生のお子さんを持つ親御さんの子育て支援を中心に、積極的に活動を続けていま

す。

私のところに相談に来られる親御さんで一番多い相談テーマが、「わが子の人間関係」です。

「仲間外れにされているようだ」

「ちょっと無視されたみたい」

「『学校に行きたくない』と言いだした」

「どうやら、ウチの子がいじめの側にいるようだ」

「学校の担任に嫌われているみたい」

などなど、学校生活における人間関係について、さまざまな相談を受けます。

ただ、相談内容の身に問わず、**子どもの人間関係問題対策として、ある共通した基本的な考え**があります。

それは、「子どもの人間関係対策には、学校でできること、親でできることが、それぞれある」というものです。

人間関係づくりに限らず、「教育・子育て」に共通するのですが、どちらかに偏っている（まかせっきり）と、うまくいきません。

学校とご家庭の両輪を回すことで初めて、子どもの教育は成り立ちます。

当たり前ですが、子どもは、つねに学校にいるわけではなく、家でも過ごします。その明確な境界線があるわけではなく、学校にいる時間も、家で過ごす時間もあつての一日です。

また、学校の先生だから伝えられること、教えられること、親御さんだから伝えられること、教えられること。それぞれの立場で役割があり、やれることがあります。

本書では、子どもたちが楽しく心穏やかに充実した小学校生活を送るために、「親が支援してやれることは何なのか？」についてお伝えしていきます。

教室の現場から見いだした 知恵とアドバイス

また、私は、長期にわたって初等教育の現場にいて、いろいろなご家庭の子育てを見守ってきました。

ここから得られた「この子とお友達になれたら、うれしいな」と周囲の子どもたちから思われるような魅力あふれるお子さんに育つよう、ママ、パパがサポートしていくためのいくつかのヒントもお伝えします。

第1章では、まわりから仲良くなりたいと思われる子の特徴をお伝えしていきます。

第2章「『お友達に好かれる子』の育て方」では、ご家庭でできる「人間関係づくり」の能力を高める方法をお伝えします。

第3章では、「こんなとき、どうすればいいの？」と題して、よく親御さんから受

ける「悩み」別に、それぞれの対策方法をお伝えします。

第4章では、親御さんにとって、学校生活における教育パートナー、支援者である学校の先生と上手な付き合い方、動かし方をお伝えしていきます。

本書が、お子さんの楽しい学校生活を過ごすためにお役に立てたら、著者としてそれほどうれしいものではありません。

はじめに——わが子の人間関係を応援するために、親ができること 1

第1章

みんなが「お友達になりたい」と
思うのはどんな子？

- 最初に、親として「意識」したほうがいいこと 18
- 教師が使っている、クラスの人間関係を把握するツール——ソシオマトリックス 19
- 子どもは、相手の真の姿を見抜いている 21
- 低い学年ほど、打算では動かない 24
- わが子のお友達になってほしい子の条件を決める 26
- 見た目は、お友達関係に影響するの？ 29
- 性格を超えて、お友達にして受け入れられる子の特徴 33
- どんな子も、自分が「大好きなこと」を知っている 36

第2章

子どもが興味を持ったことに、できるだけ挑戦させてあげる 40

「お友達に受け入れられる子」の共通点 41

みんなに「嫌われがちな子」のタイプ 44

同じ言動でも、男子と女子で差が出る？ 46

被害者と加害者は、流動的に入れ替わる 49

意外な子も、いじめられる 50

昔の「いじめっ子」、今の「いじめっ子」 52

昔の「いじめられっ子」、今の「いじめられっ子」 55

時代に関係なく、必要な力 56

「自分の気持ちや考えを表現する」能力をつけるカリキュラム 58

「お友達に好かれる子」の、 育て方

人間関係づくりの根幹は、子ども時代につくられる 64

家庭訪問、三者面談の重要性 66

わが子の視野を広げるための秘策 69

違いを受け入れる器に育てる 72

子どもを問い質すときの魔法のフレーズ 75

今の時代、「助け船」はこないから…… 78

子どもの話の「聞き方」のポイント 80

「こしよく」に気をつける 82

いじめを跳ね返すために必要な力 84

親子ゲンカの上手なやり方 86

「あなたのことが大好きなのよ」の伝え方 88

親として知っておきたい「9歳の壁」 90

教科書で勉強するよりも効果的な人間関係指導法 93

子どもは、親が「やっている」とおりになる 96

親の話しかけの影響力 97

「勉強する」も「本を読む」も「○○」で教えられる 99

なぜ語彙・読解力が「生きる力」をつくるのか？ 101

漢方薬のように、心の成長に効く習慣 104

読書習慣を持っている子の底力 109

第3章

情緒もイメージ力も育てるおすすすめ本のジャンル
なぜ学校教育と家庭教育の両輪が必要なのか？ 113

こんなとき、

どうすればいいの？

子どもが学校で見せる顔と家で見せる顔が違う 116

「学校ではひと言もしゃべらないなんて、ウソでしょ!？」 116

子どもも、親の心をおもんばかる 119

「仲良し三人組」のトラブル 121

無理やり聞き出す前に、やったほうがいいこと 123

学校に相談するときのポイント 126

家で見せる顔が一番リラックスできている状態に 127

「学校に行きたくない」と言ったら 129

理由が言えれば、まだ大丈夫 129

親に話しやすい環境をつくる「人権意識」のつけ方 131

「ハズレ」の先生に当たった 133

昔の「ハズレ」、今の「ハズレ」 133

話し合いの前にやっておいたほうがいいこと 134

「ハズレ」でも、人間関係を構築しておいたほうがいい理由 135

学校の役員や係をできるだけ引き受ける 138

先生に動いてもらうためには、どうすればいい？ 141

先生が真剣に対応してくれる親、あまり対応したくない親 141

「用件の緊急度別」に動いてもらうコツ 143

学校の敷居は高い？ 146

授業参観日の活用法 146

先生と話す機会がなかなかとれない親におすすめの会合 148

学校も保護者と仲良くしたい 150

いじめをしているかもしれないサインを察知した 152

「いじめている」可能性もある 152

もしわが子がいじめられる側だったときの対処法 154

学校に相談するときの「伝え方」のコツ 156

第4章

いじめられているかもしれないサインを察知した 159

ふだんのわが子の観察術 159

サインを察知するチェックポイント 160

サインを見つけたときの言葉かけのコツ 162

学校へのアプローチの仕方 163

ママのための「小学生の男の子」育児講座 165

男の子の3つの成長ステップ 165

甘えたいのに甘えられない。環境の変化に戸惑い——6～8歳 166

お友達との「競争」がスタート——9～10歳 167

思春期に突入し、心が不安定——11～12歳 169

学校の先生と

上手につき合うために

先生の日常を知っておくと、付き合い方が変わる 172

勤務時間はずっと教室、切れ目なし 172

先生に相談できる時間帯 175

事細かに準備されている教育計画 176

子どもたちは夏休みでも、先生は休みではない 178

親が知っておきたい「職員室&校長室」の世界 181

校長先生が誰よりも早く給食を食べる理由 183

親の前では話さない、職員室での話 184

先生同士の人間関係 188

性格的に合わなくても、互いの特技を尊重する 189

仲が良くても、時にはライバル 191

装幀◎河南祐介 (FANTAGRAPH)
本文・図版デザイン◎二神さやか
DTP◎株式会社キャップス

第 1 章

みんなが「お友達になりたい」と
思うのはどんな子？



最初に、親として 「意識」したほうがいいよ

人が二人以上集まれば、そこには人間関係が生じます。

それは、子どもだって同じです。小学校に入学したり、クラス替えがあつたりして、まわりを取り巻く人間の顔ぶれがリニューアルする――。

そんな中で、新しい人間関係を築き、友達をつくって、楽しく心豊かに学校生活を過ごせたら、親としても安心ですよ。仲良しのすてきな友達がいたら、子ども自身も、学校生活がとっても楽しいものになるはずです。

では、心穏やかには聞くことのできない子どもを取り巻くニュースがいろいろと聞こえてくる昨今、親としてわが子にできることは何なのでしょう。

そのことを考えるファーストステップとして、**みんなが「お友達になりたいなあ。**

仲良くなりたくないなあ」と思うような子どもはどんな子なのかを、親としてイメージしておくことをおすすすめします。

もちろん、「さあ、お友達を探してみよう」と呼びかけるだけでもいいのですが、もう一歩進めて、わが子のことを一番理解している親が、好かれる子どものイメージを意識しておくだけで、その後のわが子のお友達関係に大きく役立つからです。

本書で、順を追って具体的に解説していきます。

教師が使っている、 クラスの間人間関係を把握するツール——ソシオマトリックス

「ソシオマトリックス」というものがあります。

教師が、クラスの中での子どもたちの人間関係を把握するために簡単な質問を投げかけ、その答えを図解して確認し、指導に役立てようとするものです。

その質問は、たとえば、

「あなたは、誰のお隣の席になりたいですか？」

といったものです。

学期の初めに行なわれる「席替え」は、子どもたちにとっては一大イベントです。自分の周辺に誰が配置されるかによつて、次の席替えまでの期間が、バラ色になり、憂鬱ゆううつなものになったり、大げさに言えば、死活問題にすらなる子がいるのです。この本をお読みのママ、パパの中にも、ご自身が子どもの頃、「そうだったなあ」と思われる方もいらっしゃるのではないのでしょうか？

この問いかけによつて、個人的な仲良しさん同士が浮き彫りになったり、みんなから「あの子のそばにいたい」と思われている子がはつきりすることもあります。

逆に、「四六時中あの子のそばで授業を受けるのは勘弁してほしい」と思われている子がわかつたりもするわけです。

クラスを「経営」している担任から見ると、「ああ、あの子なら、さもあるう」と

いう鉄板の子もいれば、「へえ、あの子がねえ。あの子の魅力は、どのあたりにあるんだろう？」という子もいたりして、特に新しい学級を担任することになったときなど、大いに参考になることが多いのです。

子どもは、

相手の真の姿を見抜いている

幼稚園時代から小学校を卒業するまでずっと同じ顔ぶれでクラス替えがないという小さな学校から、1学年に5組も6組も存在し、最後まで同じ組になったことのない子もいるというマンモス学校まで、地域や学校規模の違いがあるので、「初めて顔を合わせる」という体験を何度もする子どもたちばかりではありません。

ただ、学校においての集団は、学級だけではありません。クラブ活動だったり、委員会だったり、集団登校の班だったり、いろいろな集団に属することになります。

新学期あるいは新学年ごとにリニューアルされる「顔合わせ」が、さまざまあるわけ
です。

今の教育現場では、親御さんの時代にあつたような「学級委員」や「児童会会長」
を選挙や推薦で選ぶというところは少なくなってきました。

「学期ごとに交替で代表を決め、各学級の代表が集まって意見交換の場を形づくる」
「児童会では、その代表委員会の中の代表が取りまとめを行なう」など、「学級委員」
「児童会会長」は、特別という感じがなくなってきました。

子どもたちは、1年生に入学したとき、あるいは、クラス替えがあつたとき、はた
また、4年生から6年生までが何かの委員会で最初に集まったときなど、イベントや
区切りごとに、お互いに「この子はどんな子なんだろう?」と、いろいろな情報を受
け取りながら判断しようとしています。

最初はあくまで印象から入ります。

◎頭がよさそう、に見える

◎優しそう、に見える

◎親切そう、に見える

◎意地悪そう、に見える

◎かつこよさそう、に見える

などなど、人それぞれの印象で相手を判断します。

でも、朝の「おはよう」から帰りの「さようなら」までずっと同じ教室で過ごしたり、定期的に同じ活動をしたりするうちに、真実の姿、正体は時間の経過とともにわかっていきます。

「優しそうに見えるのに、案外底意地が悪いんだよね」とか、「意地が悪いのかと思っただけ、困ったときに手を貸してくれたのは、あの子だけだった」とか、子どもた

ちが心の中で、「あの子といると心地いい」と感じる子と、「あまり付き合いたくないなあ」と思う子が出てくるのです。

子どもたちは口に出しては言いませんが、小学生にもなれば、お友達の真の姿をしつかり見抜いています。

親としては、子どもだからといって、お友達の真の姿を見抜けるはずはないと決めつけないほうがいいでしょう。基本的に、子どもたちはわかっているのです。

ですので、学校から帰ってきたときなどに、お友達関係についての話が出た場合、その話を尊重して耳を傾けてあげることが、とても大切になってきます。

自分ではしつかりわかっているつもりなのに、一番認めてほしい相手に自分の話を半信半疑で聞かれるのは、大人だつてもつらいことですよ。子どもだつたらなおさらです。

低い学年ほど、打算では動かない

とはいえ、1年生や2年生などの低学年生は、まだ人間関係にそれほどままれていないので、自分の思ったことや感情にストレートです。「○○ちゃん、嫌い。意地悪！」などと、本人の前でもストレートに言ってしまいうケースが多く見られます。

「あの子は嫌いだけど、頭がいいから付き合っておこう」とか、「逆らうと、あとで嫌なことをされるから、いい顔しとこう」みたいなことを考えた上で友達関係を築くことは、あまりありません。

ただ、今問題にされているような陰湿ないじめをするタイプではなく、いわゆる昔ながらの「ジャイアン型」いじめっ子などに対して「おとなしくしておこう」というのは、低学年の時点でも見受けられます。

小学3年生になると、打算的に考えたりしながら、お友達関係をつくるようになってきます。それは、けっして悪いことではなく、集団の中で自分の身を守る、防衛本

能であり、正常なことです。

親や教師からすると、子どもの本音が見えにくくなるとも言えます。大切なのは、「この人（パパ、ママ）の前では、本音を言っていないだ」という信頼関係を築いておくことです。

とはいっても、特別難しいことはありません。

学校での話があれば、ふだんからどんな些細なことでも、尊重して耳を傾けて、反応してあげることです。

特別なアドバイスができなくてもいいのです。とにかく聞いてあげて、うなずいたり、共感してあげるだけでも十分信頼関係の基礎は築けます。

わが子のお友達になってほしい子の条件を決める

わが子のまわりに存在する子どもたちは、多かれ少なかれ、何らかの影響を及ぼす

存在ですから、ママ、パパにとつても気になるものですよね。

数多くの私立の学校が存在する都市部では、「朱に交われれば赤くなる」を念頭に置いて、友達選びを周到に進めるために、義務教育の時期から受験させ、ゆくゆくはわが子の友人となり得る子どもたちを「選びたい」と考える親御さんも少なからずいらつしやいます。

家庭環境も学力もさまざまな公立の学校よりは、厳選された家庭のそれなりのしつかけをされたお子さんが入学してくるのではないか、という期待をするわけです（だからといって、必ず期待どおりにいくとは限らないのが、この世の常ではありますが……）。

その気持ちは、ホントによくわかります。

ただ、47都道府県のうち、そういった選択が可能なエリアは、そんなに多くはありません。また、ある程度の経済的な余裕がなければ、小学校から私立という選択肢は選べないでしょう。

そういう選択の余地のない状況の中でも、「こういった子と友達になってほしい」という親の望みはあるものですよね。

親御さんからの望みを聞くと、いろいろ条件が出てきます。一例を挙げてみます。

- ◎挨拶がちゃんとできるなど、しつけられている子
- ◎思いやりがある子
- ◎性格のいい子
- ◎明るい子
- ◎人の悪口を言わない子
- ◎運動ができる子
- ◎勉強ができる子
- ◎お金の管理ができる子
- ◎ご両親がそれなりの仕事をしている子

などなど。本音を伺うと、いろいろ出てくるものです。

とはいえつても、すべてが揃っているお子さんは、めったにいないものではありません。そうだとすれば、「これだけは外せない」という条件を、親として決めておきたいものです。

見た目は、 お友達関係に影響するの？

初めて顔を合わせたときは、他に何も判断材料がないので、姿形で判断するしかないのは、大人も子どもも同じです。

その子の性格も、持ち味も、性質も、バックグラウンドも、何にもわからないわけですから、仕方のないことです。

であれば、見た目が「かわいい」「かつこいい」ほうが、そうでない子より有利かもしれません。

しかし、子どもたちは、ちゃんと見る目を持っています。メッキははげるといふことを無意識ながらも理解し、本質を見抜くので、外見だけではダメされません。

外見で唯一、親として心掛けたほうがいいことがあります。

それは、「清潔感」です。

登下校のときは私服や制服を着用していても、学校に着くと運動着に着替える学校や、体育の授業時間だけ着替える学校があるでしょう。

運動着は、動きやすいばかりでなく、汚れることも想定されています。転んだり、座ったり、ボールを投げたり受けたり……。当然、土やホコリなどの汚れが付きますし、体からの汗も吸い取ります。

ふだんから通学で着ている洋服や制服以上に、**運動着の清潔感**は、とても重要です。まさに親の責任が問われることです。

成長が著しい小学生は、汗腺の働きが活発で、かいた汗も手伝って、臭いが発生してしまうこともあります。

すると、子どもといえども、隣の席に座るのがためらわれるようになってくるので
す。

小学生のいじめのきつかけになりやすいのが、この清潔感のない状況です。

小学生の清潔感は、**子どもの責任ではなく、親の責任**です。

週末には洗濯のために持ち帰るのが普通ですが、子どもが持ち帰ってこなかったときには、しっかり伝える必要があります。「自分が困るだけだから、放っておこう」なんて思わずに、そこはしっかりしつけてあげてください。

夏場などは、週の半ばにも洗うことができれば、なおいいですね。そのためには、替えの運動着がもう1枚あると安心です。

長年着用していると、何となくオフホワイト、ライトベージュっぽくなってくる。

それでも、「洗った感」があるものはOKです。

清潔感というキーワードで、もう1つ心掛けてあげたいアイテムが「靴下」です。子どもは活発ですから、すぐに穴が開いたり擦り切れたりするものです。靴下やソックスは、消耗品という意識で、ぜひこまめにチェックしてあげてください。できれば、ハンカチも忘れずに。

また、この本を手にとってくださっているママ、パパには信じられないでしょうが、「お風呂にちゃんと入ってるのかなあ?」というお子さんも、たまにいたりします。髪の毛がべたべたとしていたり、顔がなんとなくすすけたような感じだったり。

しかし、これは、完全に子どもの責任ではありません。100%親の責任です。30年も前の昭和の時代、いつも鼻を垂らしている子の存在が確かにありました。しかし、現代ではほとんど見かけません。

清潔感や見た目は、小学生のうちには、親御さんの支援、サポートが欠かせないと心得ておきたいものです。

性格を超えて、

お友達として受け入れられる子の特徴

ここまで、「わが子のお友達関係をつくる」以前に、親としてまず気をつけなければならぬことをお伝えしてきました。

ここからは、多くの子に支持される子、また、複数の子に敬遠される子というのはどんなお子さんなのかを、事例を交えながらお伝えしていきます。

「わが子は、小さい頃からやんちゃで困る」と悩む親御さんが意外と多くいます。

ところが、一見、友達には迷惑な行為ばかりしているように見える子でも、他の子を納得させることのできる、何かきらりと光るものを持っていると、受け入れられるケースが多くあります。

比較的人数の少ない5年生のクラスの中に、結構やんちゃをする男子が一人いまし

た。クラス替えのないまま高学年まできた子どもたちなので、お互いのことは、新しくそのクラスを持ったばかりの担任以上によく知っている。そういうクラスでした。

高学年ともなると、お互いの人間関係にも気を配る子も出てきて、大きなトラブルもなく生活していました。

そんなある日、「おやつ？」と気にかかるちよつとした出来事がありました。ある男子の掲示物に、消えないペンで落書きが描かれていたのです。

誰がやったのかは、すぐにわかりました。何かとやらかす、やんちゃなA君でした。ところが、ここで、落書きを描かれた子と何人かのクラスメートが意外なことを話し出したのです。

「先生、あいつはね、確かにいたずらはするし、ちよつともめると、こんなふうに頭にくることもするよ。でもね、森の中で植物や小枝を利用して、何かをつくる方法を知ってるし、食べられる植物や薬になる植物、触っちゃいけない植物まで、とにかくいろんなことをたくさん知っているんだよ。知ってるだけじゃない。蔓で入れ物を編

んだりできるし、ケガしたときに使える植物のことにも詳しくて、実際に手当てをしてくれたこともある。僕たち誰もできないことが何でもできるんだよ。結構すごいやつなんだ」

「A君にはそんな一面もあつたんだ」と、私も驚きました。人を困らせてばかりいると思つたA君が、実は仲間が尊敬するほど、誰も知らない技術と知識を持っている。オンリーワンの存在でもあつたわけです。

いかがでしょう。

親としてできること。

それは、**お子さんが何かに強い興味を持っていたら、そこをしっかりと徹底的に伸ばしてあげること**です。ゆくゆくその子の人間関係はもちろん、人生そのものをサポートすることにつながる可能性があるのであります。

どんな子も、

自分が「大好きなこと」を知っている

何かに強い興味を持つ。虫が大好きな子もいれば、自動車の知識は誰にも負けないという子もいます。

「でも、ウチの子は、どうなんだろう？　そこまで好きなものなんてないんじゃないか」

そう思っているママ、パパもいるでしょう。

でも、大丈夫。

どんな子でも、「自分が大好きなことは何か？」「興味のあることは何か？」をよく知っています。それに対しては、夢中になることができます。

先ほどのA君の場合も、パパやおじいちゃんや森歩きをしているうちに、身につけた知識と技能です。

小学生は、親の行動の影響を強く受けます。

ですから、何でも教えたりやらせてみたりして、その子の興味を引き出したり、才能を見いだすこともできるのです。

「そうは言っても……」と思われる親御さんには、普通の男の子たちが、みんなに一目置かれるようになったかっこいいエピソードも参考になるかもしれません。

家庭科の時間に、ジャガイモと青菜をメインにした調理実習をしたときのことです。ひと昔前でしたら、「粉ふきいも」と「青菜の油炒め」あたりが基本メニューです。でも、その子どもたちは、「自分たちのできる範囲で、もう少しおしやれなレシピに挑戦したい」と言ってきました。

3つの班に分かれて検討した結果、各班が出してきたレシピは次のようなものでした。

◎A班…修学旅行のときにお昼を食べたイタリアンレストランのバイキングメニューにあつた「イモック」（自分たちで名付けたジャガイモ料理）。味と調理法をなるべく再現したいということで、マッシュしたジャガイモにチーズやコーンを混ぜ小さく丸め、溶き卵とパン粉をつけ、フライパンで焼く。

◎B班…ご存じ、ジャーマンポテト。材料は、ジャガイモとタマネギとベーコン。

◎C班…ジャガイモのハンバーグ風。こちらもマッシュしたジャガイモに、みじん切りのタマネギ、ニンジンを加え、ハンバーグ風にまとめたら、片栗粉をまぶしてフライパンで焼く。

いずれも洋風メニューでした。

いざつくり始めるやいなや、

「先生、ピーラーを使っちゃダメですか？」の声が次々に上がります。今回は、包丁で皮をむき、ジャガイモの芽も取ることを課題の1つにしてみました。

ところが、こういったときに「やったことのない」子は、ギブアップなのです。

親指をかけながら、どのように包丁を入れていくか、どの部分で、手を切らないように芽を取り除くか、実演を見せながら指導したあと、「乳母日傘^{おんばひがさ}」の女子チームが、危なっかしい手つきで恐る恐る皮むきをしている中で、注目を集め出したのが男子チームでした。

さっそうと腕まくりすると、慣れた手つきでささつと皮をむき、タマネギをみじん切り。青菜を炒めるにあたっては、フライパンを軽くふると、中華の鉄人よろしく炒めている材料が空中で返るといふ妙技を見せる子もいたのです。

給食大好き of 少々ダイエツトが必要そうな体型の S 君も、野球のピツチャーでならす K 君も、将来東京で一人暮らしが希望の T 君も、調理実習の「速水もこみち」として、株が急上昇。男子厨房に入ります。

「うわー、S 君、すごーい！」「K 君、かっこいい！」

女子からは、賞賛の嵐です。その後の彼らの株は上がりっぱなしでした。

**子どもが興味を持ったことに、
できるだけ挑戦させてあげる**

彼らは、たまたま「好きこそものの上手なれ」で、そのような技術を身につけたの
かもしれません。

でも、その最初の段階では、少なからずお家の方の手本や指導があつたことは確か
です。

**危ない危ないと言って、何もやらせないでいては、いざというときに、何にもでき
ない大人になってしまいます。**

教えてもらったことに、たまたま開眼した彼らは、その力を自分のものとして落と
し込み、女子からも尊敬の眼差しを注がれる存在になったというわけです。

最初のうちは、大人がしっかり指導、管理しながら、生活に必要なある程度の「家

「庭科」的技術を習得させておいたことが、本人たちのためになったようです。

「家庭科」的技術。今の時代は、女の子だからできるだろうかとか、男の子だから無理とかは、一切ありません。そして、毎日生活していく上で使う可能性大なのに案外できなかつたりするので、それができる子に注目が集まり、人気が出たりするんですね。「何かができる」強みを持っていることは、お友達に好かれる子の大きな特徴の一つと言えます。

親としては、わが子が興味を持っていることを見抜いて、それを伸ばすための手助けをしてあげたいものです。

「お友達に受け入れられる子」の共通点

お友達に受け入れられる子の特徴は、「何かができる」ことだけではありません。

実はそれにも増して、受け入れられる子には、ある共通の特徴があります。

それは、「相手の気持ちを想像できる」ことです。

遠足や社会科見学など、学年みんなで出かけるときに、教師として特に配慮することがあります。

それは、お昼です。昼食を誰ととるかです。

子どもたちは、「好きな人同士」を希望することが多いのですが、前出の「ソシオマトリックス」などで誰からも選ばれていない子が、こうしたところで悲しい思いをしないように配慮しないと、誰からも誘われず1人残ってしまう場合があるのです。

教師としては、前もって「1人の人がいないように！」と言葉をかけておくのですが、様子を見てみると、やはり1人になってしまいう子がいます。私から「1人にしない」お達しが出ているので、彼らは一緒に食べようと声をかけます。

場を改めて、1人になりがちな子のことを他の児童にさりげなく聞いてみます。

「ねえ、B君と仲のいいお友達って誰かなあ？」

「いないんじゃないかなあ。暗いしー、あんまりしゃべらないしー、なんか苦手なん

だ、ぼくも」

そこで、クラスで「相手の気持ちを想像できる」子であるY君に声をかけてみます。「ねえY君。B君、いつも1人で寂しそうなんだけど、昼休みとかに、一緒に遊びに誘ってくれる？」

「はい、わかりました。B君って、幼稚園の頃からあんまりお話ししない子だから、ホントは遊びたくても、一緒に遊ぼうって言えないのかもしれないね」

Y君が、どうしてみんなに好かれているのか、彼の言葉からお気づきでしょうか？
彼は、相手の立場に立って、心の痛みを感じ取れる、そういう優しさを持っているのです。

相手の立場、状況、そして感情を想像して、それに寄り添ってあげる。それができる子は、お友達として受け入れられるのは当然かもしれませんが、
そういった感性を育てる方法は、第2章で詳しくお伝えします。

みんなに「嫌われがちな子」のタイプ

このように、クラスの中には、お友達として好かれる子もいれば、みんなに嫌われがちな子もいます。清潔感などの外見目は関係なく、です。

1500人以上の子どもたちを見てきて、嫌われがちな子にはある共通する特徴があります。

それは、ガキ大将である「ジャイアン」タイプのわかりやすい意地悪ではなく、やっていけないように見えて、相手が悲しい気持ちになるようなことを、裏で言ったりやったりすることです。

学年が進むほど、口には出して言いませんが、「あの子、嫌だな」と思われている場合があります。

ママ・パパの世代も「自分もやっていた」と思い当たる人がいるかもしれませんが、何人かでノートを回し、いろいろなことを書いていく交換日記は、今の小学生でもや

っています。

学校で毎日顔を合わせていても、休み時間や学校の帰り道だけでは十分ではなく、話したい内容がたくさんあるのでしよう。このノートが、LINEやFacebookなどのSNSを持たない子どもたちの代わりのツールともいえます。

この交換日記ノート自体に良し悪しはありませんが、ただ、そのノートの中でのやりとりで、感情的な行き違いが生じるケースが見受けられます。

「ここは、本当のことを書いてね」と促しながら、心に少し屈折した感情のあるお子さんが、書かれたことに対して批判めいた文句を言ってみたり、自分が優位に立つような行動を取ってしまったり、3人以上の奇数の人数でやっている場合、どちらかについて、分裂が生じるケースがあります。

その発端となる子は、どうしてもみんなに好かれれない、嫌がれてしまうのです。

このようなお子さんの場合、ご家庭に屈折した感情を生む要素がある場合もあるので、教師としては、その子自身についても細心の気を配ります。どちらかというとな

の子に多く見られるかもしれません。

同じ言動でも、男子と女子で差が出る？

同じ言動でも、「性差」で受け入れられたり嫌われたりすることがあります。

特に1、2年の低学年に多いのですが、何でも仕切りたがる女の子は、嫌がられる傾向にあるのに、男の子の場合は同じようにやっても、皆、結構言うことを聞き、そんな傾向が見られないのです。

図工の時間、絵の具ケースのしまい方について、あれやこれや言っている女の子の言動には反発する意見を述べていた子たちが、同じようなことを伝えている男の子の意見には、異議を申し立てていないのです。

これは、単に当人の男の子が、カリスマ性を持った人気者だったり、個人差の問題の場合もあります。

しかし、セクシャリティーとジェンダーという両面の性差から見ると、この現象も理解できるような気がします。

まず**セクシャリティー**の面から見てみましょう。

生まれたときの体重の平均は、男の子のほうが100gぐらい重く、骨格もしつかりしています。個人差はありますが、泣き声も男の子のほうが力強く、大きいといわれます。

また、男の子は、乗り物などの動くものに関心が向き、体を動かすことも好きですが、女の子に比べて、言語機能の発達がゆっくりで、しゃべる時期が遅い傾向があるともいわれています。

一方、女の子の場合、単語を覚え、言葉を口にする時期も、男の子と比較すると早い傾向にあり、**身の回りのことや母親がやっていること、人とのかわりにも早く興味を持ちます。**

精神的な発達も男の子より早いので、「おませだ」とか、「**口が達者だ**」とか言われ

ることも多く、母親のこともよく見ているので、ままごとなどの「ごっこ遊び」が好きです。

このような生まれたときから違いのある男女の性差がセクシャリティーであるのに対し、社会的、文化的背景からの一般常識など、親が取り入れている性差がジェンダーです。

たとえば、子どもが生まれたときの衣類の色を、「男の子はブルー」「女の子はピンク」などが典型例です。最近では問題視されている「男の子なんだから、泣いちゃダメ。しっかりしなさい」「女の子らしく、おとなしくして」といった言葉がけによってつくられる男女の性差ジェンダーもあります。

前出の仕切りたがりの女の子が、母親のように細かいことを細々と指示するのを「うざい」と感じ、体ががっしりとした男の子が発するリーダーシップには「言うことを聞こう。聞かなきゃ」という気になるという現象は、この性差ジェンダーが深くかかわっているといえるでしょう。

被害者と加害者は、 流動的に入れ替わる

また、「いじめられる」側と「いじめる」側が、何かをきっかけに入れ替わることもあるのも、特に子どもものいじめでよく見受けられる現象です。

ジャイアンみたいな典型的ないじめっ子ではなく、成績も良く明るいクラスのリーダー的存在がいじめる側にまわることもあるわけです。

ただ、いじめをしてしまう子は、**学校生活以外のストレスが影響している傾向が強く**あります。

愛情不足、子どもへの過剰な期待、両親の不仲など、**プライベートの領域とセットにして考えていかなないとなかなか解決できません。**

当たり前ですが、学校生活と家庭生活に明確な境界線は存在しません。子どもにと

つては、学校生活も家庭生活もあつての一日であり、1週間であり、1カ月であり、1年であり、人生だからです。

家庭生活でどのような対策をとればいいのかについて、詳しくは第2章以降でお伝えしていきます。

意外な子も、いじめられる

いじめられる子のタイプは限定できるかということ、38年にわたり教育現場を見てきた経験から言えば、正直難しい面があります。そんな単純な構造であれば、誰も苦労しません。

もちろん、前述のとおり、「清潔感がない」子はその確率が高いと言えますが、「まさか！」というようなことが起きるのが、この「いじめ」の世界です。

頭もいいし、話もできる。明るくも見える。

そんな優等生タイプが、標的になることもあります。

いわゆる、「嫉妬」です。

いじめる側からすれば、何でもイチャモンになりうるので、「頭いいふりしちやつてさあ。気に入くわない。あの子と口聞きたくない」。

昨日までいじめる側だった「底意地の悪い」子が、「気に入くわない」とやられる側にもなるのです。

思春期ほど、この問題はエスカレートしやすい傾向にあります。

なぜイチャモンをつけてこういう行為に至るか原因を探っていけば、行き着くところ、やる側のストレス解消です。嫉妬心の解消とも言えます。

嫉妬心は、人間であれば誰にでも湧き起こる感情です。**喜怒哀楽に続く「第五の感情」**とも言われています。それは、年齢も性別も関係ありません。

大切なのは、その**嫉妬心とどう向き合い、どうコントロール**していくかです。

私は心理学の専門家ではないので、詳しくは専門家にお任せしますが、嫉妬心と向

き合い、それをコントロールするには、自己尊重感が深くかかっています。

つまり、自分で自分を尊重できる、人は人、自分は自分、それぞれの価値を見いだすことができるかが大きく影響していると言われています。

このような観点で考えたときに親として大切になってくるのが、先にお伝えしたとおり、わが子の「好きなこと」「得意なこと」を見つけてあげて、伸ばしてあげることです。それが、結果的に自己尊重感を高める原動力になるのです。

昔の「いじめっ子」、今の「いじめっ子」

ここまで、いじめっ子、いじめられっ子の傾向を見てきましたが、その傾向は、昔と今では徐々に変わりつつあります。

「いじめ」の質が変わってきているのです。

まだインターネットもスマホも未来の出来事だった昭和の時代、普通に存在してい

たのは、ガキ大将で「ジャイアン」タイプの「いじめっ子」でした。

一見、そう見えない子が、陰湿にまわりを巻き込みながら、ジワジワと相手が精神的にとん追いつめられるまで行ない、社会問題ともなっている現代版のいじめがはつきりと認識されたのは、1984年頃からだという調査結果があります。

比較的体の大きなガキ大将が子分を引き連れて、相手がキャーキャー言ったり、困ったりするのを見ながら単発で行なうようないじめの場合、特定の子が追いつめられて自殺まで考えるようなケースは、今に比べて多くありませんでした。

また、昔は、いじめる側は少数。相手は近所の子たちだったり、自分より小柄な同級生だったり、不特定多数のことが多いものでした。

いじめられやすい子の特徴というより、「ジャイアン」に代表されるように、いじめをしやすい子の特徴のほうがわかりやすかった時代です。

絶滅危惧種のように、この次元のいじめは壊滅したわけではなく、今でも細々と残っています。ほとんど目立たず、「こらあ、何をしてるの！」の一喝で、遺恨も残

さず、消滅してしまうケースがほとんどです。

一方、今のいじめは、「ごく普通の子」が、まわりを巻き込みながら、特定の子をいじめるケースが増えてきました。

それが増えてきた大きな理由の1つに、「コミュニケーション」の変化があります。昔は、基本的に顔を合わせていないとコミュニケーションがとれなかったので、子どもたちの言動は第三者の目が届く範囲にとどまっていました。

今は、第三者の目が届きにくいコミュニケーションも可能になってきました。すでにご承知のとおり、ネットやSNSの発達で現実のコミュニケーションが表に出にくくなったため、まわりが気づきにくくなっているのです。

子どもたちの人間関係が、学校にいる時間だけでなく、下校後の時間まで「つながってしまう」「つながらなければならない」という環境になってしまったのです。「四六時中、縛られている」とも言えます。

こうしたコミュニケーション環境の変化が、「いじめっ子」の質も変えたのです。

昔の「いじめられっ子」、 今の「いじめられっ子」

ある日、今は父親より背も高く、立派な社会人となった昔の教え子と父親にバッタリ出会ったとき、そのパパがつくづく言いました。

「いやあ、先生、ウチの息子も今ではこんなんでつかくなりましたが、小学校にあがった頃は、体も小っちゃくて、いじめられやしないかと心配でした。それで柔道を習わせたんですよ」

「体も小っちゃくて、いじめられやしないか」と言うパパの心配は、昔のガキ大将的
いじめっ子の世界のいじめでしょう。

一方、ホームセンターで会った、かつての教え子だった女の子のママには、こんなことを言われました。

「おかげさまで、ウチのM子も高校生です。早いもので、来年は受験です。テニスなんかやりながら高校生活を楽しんでいます。でも、1年生になったときは、いじめに遭ったりしないかと心配でした」

このママの心配するいじめは、当時すでに社会問題となっていた、世のママ、パパが心を痛める、現代版のいじめを指していました。

このように、**社会人と高校生というお子さんの年齢差の間に、「いじめ」という言葉が指し示すものが大きく変わっています。**

わが子がいじめられないためには、どうすればいいのか？ その答えが、今と昔では違ってきていると言えます。

時代に関係なく、必要な力

ただ、昔も今も関係なく、いじめる側、いじめられる側も関係なく、いじめに巻き

込まれないための大切なポイントがあります。

それは、「**自分の気持ちや考えを表現できるかどうか**」ということです。

先ほど、嫌われやすい子にはどのような傾向があるかについて、少しお話ししましたが、自分の気持ちや考えを口にできないでいると、はつきり嫌だと思っている気持ちも表明できないし、屈折した感情が誤った方向に行ってしまう、相手を苦しめる立場にもなりかねないのです。

これは、「いじめられやすい子」が「いじめをしやすい子」に転じるケースですが、そのまた逆に転じるケースもあります。

自分の考えを堂々と述べることは、これからグローバルな社会の中で活躍する子どもにとってたいへん重要な力だとして、最近の小学校の指導要領では、**プレゼン力**を育てるような活動がどの教科でも指導内容に取り入れられています。

この能力は、その目的のみならず、**いじめ関連のマイナスの内容を回避する**一つの**能力**としても、大切な力になってきます。

「自分の気持ちや考えを表現する」 能力をつけるカリキュラム

今の学習指導要領では、どの教科においても、自分の考えを表現することについて、たいへん重きを置いています。

これまでもお話ししてきたように、いじめられやすい要素を持っている子にとっても、その逆の傾向にある子にとっても、**自分の気持ちや考えを表現できる力、コミュニケーション能力は、重要な能力**です。

現代ではいじめ用語の1つとして「シカト」という、昔の社会的制裁の「村八分」に近い言葉がありますが、これは、「完全無視」、コミュニケーションを絶つてしまう方法です。人は単独では生きていけない生物ですから、それはとても耐え難いものがあります。

では、こういったプレゼン力を伸ばす方法が、各教科にどのように取り入れられているのか、いくつかご紹介しておきましょう。

国語科での表現力アップを基盤としながら、算数においても、式・図・表・グラフなどを用いて互いに自分の考えをわかりやすく表現し、伝え合ったりします。

6年生の使っている算数の問題集の中に、ひと昔前までは見られなかったタイプの問題があります。

円の面積の出し方の基本を学習したあと、四角形や円を組み合わせた図形の着色された部分の面積を出すという問題は、記憶にある親御さんも多いと思います。パズルのように、「まず、ここの面積を出して、次にこの三角形の面積。で、ここの円の面積からこの三角形の部分をひいて……」と格闘する、あの問題です。

このタイプの問題の变化形があります。

「えりこさんは、『 $\bigcirc \times \bigcirc \times 3 \cdot 14 \parallel \bigcirc \bigcirc$ 、 $(\square + \triangle) \div 2 \parallel \diamond$ 、 $\bigcirc \bigcirc \text{---} \diamond \times \dots$ 』という式をたて、 $\blacktriangle \blacksquare \bullet$ の部分の面積を出しました。えりこさんは、どのように考えて

答えを出したのか、Aの形やBの形を説明の中に用いながら、記述しなさい」

答えを導き出すまでの考えを表現させる問題です。

外国語活動においても、コミュニケーション能力の素地を養うことが目標に挙げられています。

このように、学校の教育現場ではコミュニケーション能力向上を目指しているのですが、**ご自宅でもできる**ことがあります。

それは、基本的なことですが、**話したり聞いたりする機会を多く**つくることです。それだけでなく、男の子は、女の子に比べて大きくなるにつれて、家庭内での会話が減っていく傾向にあります。母親との言葉のやりとりが減り、だからと言って、父親と話すかというところでもなく、父親とは元々以心伝心のような関係だったりします。

日本語のコミュニケーションは、多くを語らずに「察する」ことを求められてきました。それは文化であり、基本的には変わることがないでしょう。

しかし、国際化の波が押し寄せてきている現代、そういう文化の中でも、相手に自分の言いたいことがはっきり伝わっていることが大事になってきます。

国際化という面だけでなく、テクノロジーの発達、インターネットの発達により、さらに直接コミュニケーションの機会が減り、ますます、自分の言いたいことをしっかりと伝えることが求められる時代です。

だからこそ、**ご家庭でも、きちんと話を伝えていく基礎練習が必要**になってきます。まずは、あまりにも簡単なことですが、「挨拶をしっかりとる」です。「明るいあいさつ運動」などに取り組んでいる学校も多く、しつかりはつきり挨拶する効用は、気持ちいい、清々しいという感情的なものだけでなく、**コミュニケーション能力の向上**にまで及びます。

朝起きたら「おはようございます」、家を出るときは「行ってきます」「行ってらっしゃい」、家に帰ってきたら「ただいま」「おかえりなさい」、寝る前には「おやすみなさい」、初対面の人との「こんにちは。初めまして」。

それは、**子どもに強制するのではなく、まずは親からすすんでやっていきたい**ところです。最初はなかなかしない子だったとしても、小学生だったら、まず間違いない、身についていくはずで**す**。

挨拶の次のステップは、「感謝の気持ちを伝える」です。

「ありがとうございます」という感謝の言葉を口にされて、嫌な気持ちになる人は**ま**ずい**な**いでしよう。

ポイントは、「**ありがとうございます**」に**プラスのひと言を添えてあげる**点です。

家族の中でも、「ありがとうございます。手伝ってくれて、助かったわ」と、「ありがとうございます」に簡単な感謝の言葉を添えて気持ちを伝えてあげてください。

その**ひと言添えが、大きな差**になっていきます。

家でやっていることは、おのずと学校でもやるようになります。それが、最終的に子どもの人間関係をスムーズにする力に変わります。

たかが挨拶、されど挨拶。ぜひ今日から試してみてくださいね。